

# 永久平和を願ってハピネスへの道

株式会社日本レーザー代表取締役社長 近藤宣之

“There is no way to happiness.”

ハピネスの会で、隆久先生からいろいろなことを学んだ30代を経て、40代は米国ボストンで駐在生活をしていました。その米国でアメリカ人牧師から聞いた言葉で、もつとも印象に残った言葉が、

“There is no way to happiness.  
Happiness is the way.”

でした。  
幸福とは何か？ どうしたら幸福になれるのか？ 人生の満足とは何か？ 何のためにこの世に生まれ、何のために生きるのか…？という問いにこの一言が答えていることに気づきました。

振り返ってみれば、「健康で過ごしたい、カッコよくなりたい、魅力ある人間になりたい、もつとお金がほしい、もつといい住宅に住みたい、もつと欲しいものを自由に買いたい、出世をして社会的に名誉ある地位を占めたい…」と願い、そうしたことが

実現することが幸福の条件と考えていました。

しかし、そうしたことが実現したからといって、幸福になれるとは限りません。他人と比較してまだまだと思うでしょうし、何か条件が満たされて幸福になるわけでもないのです。人間の欲望には、切がない、と気づきました。

“There is no way to happiness.” とは、幸福になるための、普遍的な道もなければ、一般的な条件もない、こうなったら、幸福になれますよ、ということはありません。ことを意味しています。

“Happiness is the way.” は、英文としてなかなか難しい。前の言葉を受けての、“the way” とは、そうした幸福になりたいと思って努力する過程、生きていくプロセス、日々の生活の場での実践そのものです。

“Happiness is the way.” とは、そうした日々の実践の中に、幸福があるのだ、と解釈しています。

病に冒されても、生き抜く希望をもって日々感謝して生きる人と、健康でも、不満をもって日々の生活を生きる人のどちらが幸福なのか、個人の価値観によっても変わります。

人は、偶然ではなく、何らかの意味をもって生まれたわけであり、生命が尽きるまで、この外側の身体(肉の身)を借りて、内側の自分(魂)を磨くことで、自分の人生の役割を果たせる、ということも隆久先生から学んだことです。

## 「4つの言葉」

ハピネスの会で、隆久先生から学んだこととで、その後30年あまりにわたって生活の中で実践してきていること、それは、「4つの言葉」です。

「有り難うございます。」——(感謝)  
「「めんなさい。」——(懺悔)  
「これでよろしいでしょうか。」——(戒律)  
「どうぞ宜しくお願いします。」——(帰命)  
あらゆる宗教の絶対的な共通要素の4つです。

ボストン駐在時代に、成功したアメリカ人ビジネスマンから聞いた話があります。

「人は、健康で、能力があり、ハードワー

ク(努力)をすれば成功すると思いがちだが、それだけでは十分ではない。幸運に恵まれなければ成功しない」  
さらに続けて、

「幸福はどこからもたらされるか? それ  
は、自分を生かしてくださる存在への感謝  
である。その存在をわれわれは神と呼ぶ  
が、"Something Great"と呼んでよい。神  
への感謝が、健康、能力、努力に加えて成  
功の条件だ。」  
と強調されました。

人は、苦しい時には、神頼みをします。  
だから、不況の日本では、お正月には、国  
民の4分の3、9000万人の人が、神  
社、仏閣へ初詣に行きます。しかし、神様  
は、こちらの都合通りに、お願いだけを聞  
き届けてくれるでしょうか?

「4つの言葉」は毎日の実践です。朝目  
覚めたときに、1日の終わりの就寝時に、  
日中でも折に触れて、唱える言葉です。そ  
うすると、幸運が来て、応援団が現れて、  
仕事も好循環になります。「俺が俺が」と  
自分なりにやっつけていては、常に「気づき」  
(痛み目)が来ます。

「4つの言葉」は、"Something Great"  
に対しての祈りです。

「有り難うございます。」——“生かし  
ていただいて、有り難うございます。この

仕事をさせていただいて、有り難うござい  
ます。こうした出会いに、有り難うござい  
ます。このような気づきを戴いて、有り難  
うございます。”——等々具体的に、感謝  
します。

「ごめんなさい。」——“自分な  
りに生きて、ごめんなさい。自己中心にや  
つて、ごめんなさい。生かされていること  
を忘れて、ごめんなさい。自分の非を、  
周りのせいにして、ごめんなさい。”——  
等々一般的に、お詫びします。

「これでよろしいでしょうか。」——“  
自分は今、位置についているでしょうか?  
やるべきことをやっているでしょうか?  
してはいけないことをしていないでしょ  
うか?”——等々お伺いします。



米国での展示会、Photonics West2009  
(San Jose, CA)にてHeidelberg社の  
創業者Dr. Roel Wijnandtsと  
(平成21年1月)

最後に、「どうぞ宜しくお願いします。」  
——“あるがままに受け入れて生きてい  
きます。”という、祈りです。

こうした「4つの言葉」を日々口にする  
ことを習慣化することが大切です。実践し  
てみれば、健康を損ねたときや、仕事や生  
活の上で辛いときには、本当に救われます。

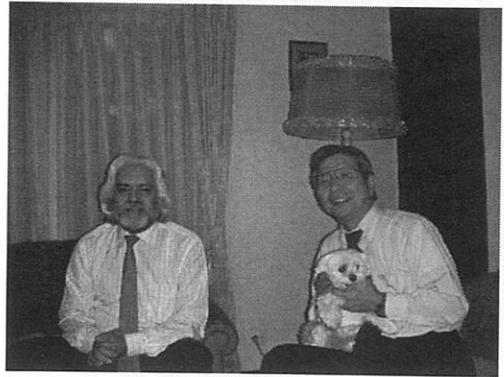
## 「今、ここ、自分」

宇宙の歴史、地球の歴史に比べれば、人  
類の歴史数百万年は一瞬のことです。その  
人類の歴史の中で、人の一生はせいぜい百  
年ですから、この人生は、正に、一瞬の一  
瞬です。それでも、自分の一生は長いから、  
「まあいいや」という日々の生活態度にな  
り勝ちです。

こうした生活態度に、はっとさせられた  
言葉が、隆久先生から伺った、お釈迦様の  
生き方としての「今、ここ、自分」です。

「瞬間に生きる」——今こうして生きて  
いるのは、今だけ。過去はもう戻らない。  
明日は生きているかも分からない。今を生  
きているのだ。だから、今、やらなくてい  
つやるのだ。明日まで延ばしてやろうとし  
ても、その明日は、来るとは限らない。

現に、今君が生きている今日は、誰かが  
生きたかった明日なのだ。年々そうした思



独の取引先 Sympatec 社  
Dr. Stephan Roethle 社長を自宅に招待して  
(平成 21 年 11 月)

いを強くしています。特に昨年(2009年)9月に39歳の社員が、小学生の子供二人を残して肺がんで急逝したことで、若い社員もそうした実感を持っているようです。「ここに生きる」——自分はどこに生きているのでしょうか。「ここ」です。この家に生き、この会社に働き、この社会にかかわりを持ち、この日本国に生きています。もちろん、家を出ることも、転職することも、海外へ移住することも自由です。しかし、どこに行っても、「ここ」に生きているのです。ここに生きていながら、「ここ」でなければ、幸福になれる、「ここ以外のどこかならば、自己実現ができる」と考える人は、どこで全力を尽くすのでしょうか?

「自分が主人公」——人生は自分の人生です。他人のものではありません。何事も自分がやらなくて、誰がやってくれるのでしょうか? 「誰かがやってくれる、誰かが幸福にしてくれる…」と考える人は、結局他人依存の人生を歩むことになりませんか?

「今、ここ、自分」——「今やらなくて何時やるのだ、ここでやらなくてどこでやるのだ、自分でやらなくて誰がやるのだ」、そうした思いで日々実践することで、この世の人生が充実すると思います。

## 「2点間の最短距離」

この3月で66歳になりますが、大きなチャレンジの年、2010年を迎えエキサイトしています。しかし振り返ってみれば、当然のことながら、多くの出会いと縁に恵まれて生きてきました。

慶応義塾大学工学部電気工学科を卒業して、電子顕微鏡の世界的メーカーで、一部上場企業、日本電子に就職した私を待っていたのは、荒れた労使関係でした。

多数派の共産主義労働組合とそれに反発する民主的労働組合が対立する中で、会社の業績や待遇の向上もままならない状況でした。

電子顕微鏡の技術者として入社したのに、間もなく民主的労働組合の役員に推され、入社4年目には、わずか28歳でその労働組合の執行委員長に就任することになりました。

その前の大学時代に、交換実習生として、ドイツに派遣され、東西ベルリンにも長期滞在して、市場経済で戦後復興を図る西ベルリン側と、社会主義計画経済での社会建設を図っている東ベルリン側の現実を目の当たりにして、マルクス主義の幻想を実感しました。ベルリンの壁が崩壊したのはそれから24年後の1989年でした。

1980年代後半を頂点とする、戦後日本の経済的繁栄は、いわゆる日本的経営の三種の神器、「終身雇用」、「年功序列的賃金制度」そして「民主的な企業内組合」がもたらしたもので言われています。

その後、会社は企業危機を迎えて、全従業員の3分の1にあたる、1000名を超える人員整理という修羅場も経験、そのために30歳代は組合リーダーという人生になり、企業人としては回り道をしました。

しかし、組合の立場からも、「去るも地獄、残るも地獄」の企業再建活動に携わり、主力銀行とともに、日本電子の自主再建を達成できたことは、貴重な経験でした。

自主再建達成後は、職場に復帰。すぐに米国法人のニュージャージーでの事業の再



米国大企業、Newport の Top 3 を  
日本レーザーの本社に迎えて（平成 21 年 12 月）

建のために米国に派遣され、そこでも英語と格闘しながら、現地法人の業績直しを経験。お陰で、ボストンに本拠のある米国法人の総支配人になり、本社の取締役になり、45歳で抜擢されました。

8年余りのボストン駐在から帰国後間もなく、系列の子会社である、レーザー輸入専門商社が債務超過になったため、本社でも最年少の役員であったことや、英語ができることなどから、再建社長として派遣されました。

ここでも与えられた任務に全力を尽くしましたが、3期6年務めた親会社の取締役

を退任したことで、その会社の社員自身が、企業再建を自分のものとして本気で取り組むようになり、そのお陰で、わずか2年で累積損失を一掃して、企業再建と社員の待遇回復を達成できました。

上場企業、日本電子の関係会社である、この日本レーザーの社長を13年間務めて、2007年に、M E B O (Management Employee Buy-out)により、親会社から独立をしました。親会社の出資比率は15%未満となり、85%以上は、全役員、全社員が所有することになりました。「会社は誰のものか」という問いへの一つの答えです。売上も再建時の10億円から3倍の30億円を超えました。

こうして振り返って見ると、人生は直線的には進みません。アップダウンがあり、紆余曲折の連続です。その中で、30代に前述のように、隆久先生から学ばせていただいたことに大変感謝しています。

「人生では2点間の最短距離は直線ではない」と教えてくれたのは、慶応義塾大学医学部を出て陸軍軍医として満州を転戦し、九死に一生を得て無事帰国した父でしたが、これからもご縁と、応援団の皆様感謝して、今後の人生を歩んで行きたいと思えます。

#### 近藤宣之

1944年東京生まれ。慶応義塾大学在学時代にドイツ交換実習生として渡欧。68年大学卒業後日本電子(株)入社。電子顕微鏡部門応用研究室勤務を経て、70年よりソ連、レンニングラード、モスクワ駐在。72年より84年まで全国金属労働組合同盟(ゼンキン同盟)日本電子労組執行委員長、ならびに東京地方金属副執行委員長、ゼンキン同盟中央執行委員を兼任。学生時代の両ベルリンでの体験から階級闘争主義に反発し、労使関係の民主化に取り組む。87年米国法人総支配人として事業所の統合やレイオフによる企業再建に直面。89年日本電子(株)取締役、94年(株)日本レーザー代表取締役社長に就任。債務超過に陥った日本電子の関係会社である日本レーザーを、銀行も見放した状態から再建し、10年で30億円企業に成長させた。現在は、日本レーザー輸入振興協会会長、JLCホールディングス(株)代表取締役社長をも兼務。